

# 言語能力の育成に学校図書館が果たす 教育的役割の研究と教材開発

研究代表者：桑田 てるみ

(国土館大学21世紀アジア学部准教授)

共同研究者：眞田 章子

(かえつ有明中・高等学校司書)

庭井 史絵

(慶應義塾普通部司書教諭)

野村 愛子

(田園調布学園中等部・高等部司書)

大木 理恵子

(かえつ有明中・高等学校教諭)

山田 英雄

(かえつ有明中・高等学校教諭)

法土 明子

(カリタス女子中学高等学校教諭)

五十嵐 卓司

(カリタス女子中学高等学校教諭)

黒瀬 卓秀

(カリタス女子中学高等学校教諭)

木之下 瞬

(かえつ有明中・高等学校非常勤講師)

五十嵐(山崎) 佐知子

(晃華学園中学校・高等学校非常勤講師)

## 研究成果要約

### 研究活動概要

新学習指導要領（2008年告示）では、すべての教科での「言語活動の充実」が明記され、国際的に通用する「思考力・判断力・表現力」の育成が求められている。中央教育審議会の答申には、言語活動の充実のための「条件」として学校図書館の活用が示されている。そこで、PISA 型読解力などの、中学生の国際的な言語能力の向上に学校図書館がどう寄与できるかについて、学校図書館と複数教科とが共同研究を行った。そして教科を越えて言語能力を育成するための学校図書館教育の教材開発を目指した。そのために行った研究を以下3つにまとめ報告する。

#### 【研究1】国際的に通用する言語スキルの抽出

研究1の目的のために、新学習指導要領の「言語活動」で求められる言語スキルだけではなく、アメリカの言語教育で指導される言語スキル、アメリカ・カナダの学校図書館教育で指導される言語スキルを検討した。

#### 【研究2】国語科教員と学校図書館専門職員との言語スキル指導可能性の検討

研究1で明らかになった言語スキルについて、国語科教員と学校図書館専門職員とが指導可能かどうかを質問紙調査およびインタビューで検証した。

#### 【研究3】教科と学校図書館との協働授業による言語スキル教育の実施と検証

研究2の結果、国語科よりも学校図書館での指導可能性が高くなった言語スキルの指導教材を開発し、学校図書館と教科との協働授業によって指導した。また、その効果検証のために生徒への質問紙調査を行った。

### 成果概要

#### 【研究1】国際的に通用する言語スキルの抽出

今後生徒に必要とされる国際的な言語スキルは、クリティカルな思考をサポートする言語スキルであることが判明した。具体的には、「比較と対照」「原因と結果」などで考察するスキルや「批評」や「評価」のスキル、矛盾のない論旨を展開するための「論証」のスキルなどであった。それらは言語の持つ「思考と論理」の側面が必要とされるスキルである。

#### 【研究2】国語科教員と学校図書館専門職員との言語スキル指導可能性の検討

探究型の学習で必要となるスキル、情報を読み考察し論述するスキルは、学校図書館専門職員も指導できる可能性が高いことがわかった。書籍全体を扱うスキルからグラフを読

み解くスキルまで多様なものが指導可能とされた。

**【研究3】教科と学校図書館との協働授業による言語スキル教育の実施と検証**

言語の持つ「思考と論理」の側面に着目し、教科を越えて活用できる「考える型」を使った教材を開発し実験的な実践研究を行った。その結果、事後の生徒への質問紙調査では、学習への理解度と「考える型」の有用性が高い値になったことがわかった。

**成果活用について**

**【研究1、2】**の一部は、2009年8月の日本教育学会の第68回大会にて発表した。

桑田てるみ、山田英雄、法土明子（2009）

「学校図書館が用いる探究型学習モデルに内在する言語スキルの問題～英語母国語教育とわが国の国語教育との差異に着目して～」

**【研究3】**の一部は、2009年9月の日本学校図書館学会研究大会、および2010年2月の早稲田大学公民教育研究会にて発表した。

眞田章子、桑田てるみ（2009）

「『思考力開発センター』としての学校図書館の役割 ～Critical Thinker を育成する教科「サイエンス」と図書館教育との統合～」

五十嵐卓司（2010）

「クリティカルシンキングと「言語活動の充実」を目指す授業実践」

**【研究1、2、3】**のすべてと、この報告書に書きつくせなかった研究をまとめ、2010年3月に書籍を自費出版した。なお、この書籍の内容に関する学習会（教員・図書館員向け）の開催（初回5月）を始めた。

桑田てるみ、眞田章子、庭井史絵、野村愛子、五十嵐卓司、大木理恵子、木之下瞬、黒瀬卓秀、法土明子、山崎佐知子、山田英雄、唐澤智之（2010）

『思考力の鍛え方 学校図書館とつくる新しい「ことば」の授業』静岡学術出版

**今後の研究課題**

本研究では、新学習指導要領が求める言語スキルに関わる教育に対し、学校図書館も多岐にわたる教育的な効果が果たせることがわかった。しかし今回はその一部の効果のみを検証したにとどまった。今後は、検証できなかった言語スキルについても教科と学校図書館の協働授業を行うことで検証する。また、生徒が一度学習した言語スキルや「考える型」の利用方法を他の学びに転用できるかについての検証には至らなかったため、今後の課題としたい。

# 研究成果論文

## 1. 研究の背景

新学習指導要領（2008年告示）では、「思考力・判断力・表現力」を育成する観点から、すべての教科での「言語活動の充実」が明記された。この学習指導要領の改訂には、OECD（経済協力開発機構）の学習到達度調査（PISA）で日本の生徒の得点が低かったことが大きな影響を与えている。PISA 調査によって、日本の生徒には思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題があることが判明したのである。

その PISA 調査で測る読解力には、単に「読み取る」だけではなく「熟考」「論述」し、さらにそれを「論理的に表現」するなどの「思考力」が求められる。これは、ただ読めば自然と身につく能力ではなく、それなりの訓練が必要とされる。欧米では、PISA 型読解力に求められているような自ら考える力、クリティカルな思考力のある子どもたちを育てるために、言語に関する技能（以下、言語スキル）を教育している。母国語教育であるランゲージ・アーツ（Language Arts）の中で、さまざまな言語スキルを徹底的に教育し、クリティカルに考えられる子どもを育成しているのである。

日本の生徒にも、国際的な言語スキルを育成するような「言語活動」を行うことで、PISA 型読解力の向上や新学習指導要領が求める「思考力・判断力・表現力」の育成につながると考えられる。しかし、このような国際的な言語スキルの教育を行おうとすれば、従来の国語科における狭義の言語教育だけでは十分な教育効果が期待できないのではないかと推測される。また、国語科だけが言語スキル教育を行うのでは、新学習指導要領が求める「言語活動の充実」を実現することは難しい。あらゆる教科の基礎教養として、言語スキル教育が必要だと考えられる。

そこで、本研究では、新学習指導要領への指針を示した中央教育審議会（以下、中教審とする）答申（2008）の中で、言語活動を支える「条件」として示された「学校図書館」を取り上げる。学校図書館は、「教育課程の展開に寄与する（学校図書館法第2条）」機能を持つため、新しい学習指導要領の展開にも寄与しなくてはならない。また、学校図書館はどの教科とも協働授業を組むことができるため、学校内の教育的なハブとしての機能を果たすことが望める。そのため、生徒の言語能力の育成に学校図書館が果たす教育的な役割を再確認することは重要な意味を持つと考えたのである。

## 2. 研究の目的と方法

### 2.1 研究の目的

前述のように教育界が国際的な言語スキルを取り入れようとするならば、学校図書館も欧米で行われている教育を参照すべきである。欧米の学校図書館では、生徒がクリティカルな思考（たとえば、分析、統合、評価、整理）を必要とする探究型学習の場面で積極的な支援をしている。アメリカでは問題解決のプロセスモデルである Big 6 Skills を利用し、カナダでは探究学習のための教科書でもある Focus on Inquiry などを参照し、多様な教育手法を取り入れている。

一方、日本の学校図書館でも探究型学習が行われているが、決まった形の「教材」は存在しない。探究型学習は学習の成果物として小論文を課すことが多く、調べて熟考し論述するため、PISA 型読解力や「思考力・判断力・表現力」を育成するためには有効な学習形態である。しかし、具体的にどのような言語スキルをどのように支援したらいいのか明らかになっていない。そこで、言語スキル教育のための教材が明らかになれば、学校図書館が生徒の読解力や思考力を高めるための教育を「すべての教科」の学習の中で展開できると考えた。

以上をふまえ、本研究では、生徒の国際的な読解力や思考力の向上のために、学校図書館が言語スキル教育の手法を用い、どのような教育支援が展開可能か、海外の事例も参考に具体的に考察することが目的である。

### 2.2 研究の方法

本研究のためには、まず必要となる言語スキルを国際的な視点から明らかにし、言語教育を引き受ける国語科と学校図書館との役割分担を考える必要がある。それらを考察したうえで、学校図書館からの言語スキル教育支援の教材を開発し、実際の教科教育の中で実践しなければならない。それによって、新学習指導要領が目指す多様な教科での「言語活動」を支援する学校図書館の役割を明確にすることが可能となる。

そこで、研究を3つの部分に分けた。まず、【研究1】は、新学習指導要領が求める言語に関する能力やスキルにどのようなものが想定されているか概観し、次にアメリカの言語教育（Language arts）の教育内容やアメリカ・カナダの学校図書館教育で指導されている言語スキルを抽出した。これは、今後の「知識基盤社会」を生き抜くために生徒に求められる国際的な言語に関するスキルを具体的に明らかにすることが目的である。そして【研究2】は、日本の国語科教員と学校図書館専門職員に対して、研究1で抽出した言語スキルの指導の実施状況や指導可能性について質問紙調査と補足のインタビュー調査を行った。学校図書館が言語能力の育成に寄与できる部分を見出すことが目的である。さらに、【研究3】は、研究2の質問紙調査の結果から、国語科よりも学校図書館の指導可能

性が高い言語スキルを選択し、図書館と教科との実験的な協働授業を行った。そして、効果を測るために生徒への質問紙調査を実施した。

そのため本稿では、第3章で【研究1】国際的な言語スキルとその教育について概観し、第4章で【研究2】国語科教員と学校図書館専門職員への質問紙調査の結果と考察を述べ、第5章では【研究3】それまでの研究の結果を踏まえ実験的に行った協働授業の内容とその成果について述べることにする。

### 3. 【研究1】国際的に通用する言語スキルの抽出

#### 3.1 新学習指導要領が求める言語にまつわるスキル

##### 3.1.1 中央教育審議会の答申の内容から見る言語スキル

中教審答申（2008）の「言語活動の充実」の項では、「言語」について、「知的活動（論理や思考）だけではなく、（中略）コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある」としている。そして、このような言語の果たす役割に応じた学習活動を国語科と各教科とに分けて提示している。

国語科については、「これらの言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する」とした。そして、「発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う」とされている。

各教科の言語活動は、「このような国語科で培った能力を基本に」とした上で、多くの論理的な思考のための技能（以下、思考スキル）や言語スキルが記載されている。例えば、「視点を明確に」「差異点と共通点をとらえ」「比較」「分類」「関連付け」「帰納的」「演繹的」「評価」「まとめ」などは論理的な思考スキルが必要である。また、そのように考察した結果を、「記録」「報告」「説明」「表現」「記述」「説得」「議論」などの言語スキルを用いて表現するのである。各教科の言語活動には、言語の持つ「論理や思考」の面を重視したスキルの教育が求められていることがわかる。

##### 3.1.2 新学習指導要領「国語科」と「総合的な学習の時間」での言語スキル

言語活動の要となる国語科の新学習指導要領の「言語活動例」には、「評価」「批評」という学習活動が追加された（文部科学省、2008a）。「評価」「批評」という文言は旧学習指導要領にはない項目であるため、大きな変更点であり、注目すべき言語スキルだといえる。

また、新学習指導要領では「習得・活用・探究」というキーワードのもと「総合的な学習の時間」で探究的な学習をすることが求められている。『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』（文部科学省、2008b）には「体験したことや収集した情報を、言

語により分析したりまとめたりすることは、問題の解決や探究活動の過程において特に大切にすべき」と記されている。

さらに、探究的な学習には、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動、すなわち①「課題の設定」②「情報の収集」③「整理・分析」④「まとめ・表現」といったプロセスを繰り返し学習することが重要だとされた。特に③「整理・分析」では、収集した情報を「分類」する、細分化して「因果関係」を導き出すなどの思考をさせる必要性が示された。具体的には、「比較」「分類」「序列化」「類推」「関連付け」「因果関係」などの考え方を駆使したり、「グラフでの整理方法」「統計的な技法（母集団傾向の把握）」「カードへの整理方法」「時間軸で並べる技法」「マップなどの空間軸に整理する技法」などを利用して情報を分析したり評価したりする方法が示されている。また、④「まとめ・表現」の段階では、分析した結果を他者に伝えたり、自分自身の考えとしてまとめたりする言語活動の重要性が指摘されている。つまり、思考を伴った言語活動を行うことが必要とされたのである。

国語科で培われる「評価」「批評」の能力は、「総合的な学習の時間」での探究的な学習でも活用されることになる。そして、この「評価」という認知活動は、Bloom (1956) の Taxonomy (分類学) で6段階に分けたレベルの中で最も高次の知的活動であることに注目したい(表1)。アメリカでは、「知識」の注入から始まり、知識の「理解」と「応用」を行い、さらに得た知識を「分析」し「統合」し、最終的に「評価」する訓練を行う。義務教育全般を通して認知レベルの低いタスクから順に、しかも螺旋的に難易度を上げながら繰り返しトレーニングしていく。まさに「総合的な学習の時間」では、このような教育を狙っていると考えるのもよいだろう。言語の持つ「論理や思考」の面が強く求められていると言い換えてもよい。そこで、新学習指導要領に寄与する教育を模索するためには、次節に示すアメリカの母国語教育や学校図書館教育の内容を参考にすることは不可欠なことだといえる。

表1 : Bloom's Taxonomy

1. Knowledge (知識)
2. Comprehend (理解)
3. Apply (応用)
4. Analyze (分析)
5. Synthesis (統合)
6. Evaluate (評価)

### 3.2 アメリカのLanguage artsの教育内容と学校図書館教育から見る言語スキル

#### 3.2.1 アメリカのLanguage artsに見る言語スキル

アメリカのLanguage Artsとは、基本的に「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的にバランスよく身につける言語力育成のための科目であり、日本の国語科に該当する。

まず生徒たちは、読み方のストラテジーを勉強した上で、文の作り方、パラグラフの構成法を段階的に学習する。また、4つのテキストのジャンルの違いに沿った構成、7つの

パラグラフのパターンに応じた語句や表現を適宜うまく使い分けることを学ぶ(表2)(Mikulecky, 1989)(Reid, 1987)(Shiras, 2001)。

「読む」「書く」を統合した活動によって言語スキルを習得し、様々な教科で必要とされるアカデミック・ライティングにも役に立つような教育が段階的になされている。具体的には、生徒は情報をより早く正確に把握するために「スキミング・スキヤニング」などの下読みを行い、「要約」し「アウトライン」をつかむこと、またそのための重要ポイントとして「上位概念・下位概念」などの階層構造を意識することを学ぶ。そして、これらは「帰納法・演繹法」を取り入れた読解や書き方に結び付く。さらに、物事を「比較と対照」で見極め、「類似性」を見つけ、「原因と結果」を意識した読解や書き方を訓練することで情報を的確に分類・整理し、論理的に分析する目を養う。最終的には、培われた各スキルを駆使して「論証」や「批評」をするのである。

そして、このような「読む」「書く」の基本的な言語スキルが下支えとなって、自ら設定したテーマの問題解決のために文献を探し、分析的に読み、また自分の意見や仮説を立証するために文献から得た知識や情報を取り入れてレポートを作成する学習が行われる。つまり、探究型学習に必要な言語スキルも、このようにして母国語教育で育成されるのである。言語力は探究的な学習を通して育むことができるとも考えられており、Senator (1995) は、Dewey の“Learning by doing”の考え方こそが中等教育では子どもの言語力育成に大きく貢献し、より効率よく学習を促進すると説明している。子どもが自ら意味のある興味深い質問をする方法を教えることが、Language Arts の教育の第一目標ともなっているのである。

### 3.2.2 アメリカ・カナダの学校図書館教育に見る言語スキル

このように英語母国語教育の基本的なスキルを学ぶことは、探究型学習を支えるためにも重要な学習である。そして、それが他者に対して責任を持った発言ができる「Critical

表2：Language Arts の指導

<b>読み方のストラテジー</b>	
Skimming	スキミング (概略読み)
Scanning	スキヤニング (情報特定読み)
Identifying genre	ジャンルの識別
Summarizing	要約
Paraphrasing	書き換え
<b>テキストのジャンル</b>	
Narration	物語文
Description	描写文
Exposition	説明文
Argumentation	論証文・意見文
<b>パラグラフのパターン</b>	
How-to-do-it / Process	手順・過程
Definition	定義
Classification	分類
Description	描写
Compare and contrast	比較と対照
Causes and effect	原因と結果
Chronological order	時系列



Thinker」を養成することにもなっている。それは PISA の調査内容とも密接に関連しているのである。

アメリカの学校図書館では、そのような教育に対して多様な言語スキルを用いた支援を探究型学習の際に行っている。Big 6 Skills モデルや Focus on Inquiry の中には、さまざまな言語スキルが提示され、実際に教育されている。例えば、図書の検索時に「上位概念・下位概念」を把握すること、情報を読み解く時に「スキミング・スキヤニング」を行い、「比較と対照」という批判的な思考スキルを用いること、さらに「原因と結果」「時間順」にまとめ、「批評」することなどが示されている。すなわち、探究型学習の過程では、情報の分析や評価のスキル、クリティカル・シンキングのスキルが不可欠であり、情報の検索や記録の方法とともにそれを指導すべきとされているのである。

また、アメリカの学校図書館の最新ガイドラインである「21世紀の学習者のための基準 (AASL, 2007)」には、情報が拡大し続けているため個人が自分の力で学習するための思考のスキルを身に付けなければならないこと、学校図書館が学習スキルの発達にとっては不可欠であることが信念として述べられている。そこで必要とされる具体的なスキルは、読む、見る、聞く、推論、分析、統合、評価したりするスキル、理解したことを効果的に伝える書き方、話し方など多様な言語スキルである。学校図書館の指導と言語スキルとを切り離すことはできないことがわかる。

アメリカやカナダの学校図書館では、このような教育のためには表やワークシート（グラフィック・オーガナイザー）を活用すること、複数の教員、または学校図書館の専門職員と教員とが協働する必要があることも指摘されている。このように、基本的な言語スキルは、Language Arts や学校図書館を通して繰り返し指導することで身に付いていくのである。

### 3.3 【研究1】の結果、抽出した言語スキル

新学習指導要領の目指す教育、アメリカの Language Arts が目指すクリティカルな発言ができる生徒の育成、それを支援するアメリカ・カナダの学校図書館教育など、ここまでの研究で明らかになった言語スキルを表3にまとめた。

これら60項目は、言語の持つ機能のうち、「論理と思考」に関わるスキルであり探究型学習にも必要なスキルである。国際的な「思考力・判断力・表現力」を育成するための言語スキルとして必要なものだと考えられる。

表3：「思考力・判断力・表現力」を育成するために必要と考えた言語スキル

1	文章の主題やキーセンテンスを見つける方法
2	文章の構成（アウトライン）のつかみ方
3	事実と意見とを区別する方法
4	要約のしかた
5	論証のしかた
6	批評のしかた
7	ある文章を自分の言葉で言い換える方法
8	書籍の一部ではなく、1冊の書籍全体から主題を見つける方法
9	書籍全体の構成のつかみ方
10	同義語・反意語などの語の関係性
11	上位語（上位概念）・下位語（下位概念）の関係性
12	単語が持つ意味を、文章の道筋の中で捉える方法
13	ある概念を言葉で表す場合の、概念と言葉との関係性
14	参考図書で調べられる語とそうではない語の見分け方
15	帰納法と演繹法との考え方の違い
16	複数の事象（たとえば単語や文章）間の類似性を見つけ、それを根拠に他を推論する方法
17	マッピングで発想したり整理したりする方法
18	ベン図を書いて考える方法
19	社会的な事柄を含む広い範囲から自らの課題を設定する方法
20	日常的に読書に親しむために、学校図書館を計画的に利用する方法
21	図書や資料の検索のために図書館や情報機器を利用する方法
22	必要に応じて本や文章などを選ぶ方法
23	（生徒の）発達の段階に応じた読書のしかた
24	文章中の単語の意味を確認しながら読むこと
25	段落を意識した読み方
26	拾い読み・下読み（スキミング・スキヤニング）の技術
27	主題と主題を支える部分の読み分け方
28	文章を読む時の、効果的な線の引き方や印の付け方
29	一段落内の文章構成の読み解き方
30	「時間順」で構成された文章の読み方
31	「カテゴリー別」に整理された文章の読み方
32	「原因と結果」で構成された文章の読み方
33	「比較と対照」で構成された文章の読み方
34	資料の特性を生かした読み分け方
35	書籍の序文や目次の使い方・読み方
36	書籍の索引の使い方・読み方
37	辞書の使い方・読み方
38	百科事典の使い方・読み方
39	新聞記事の読み解き方
40	同一主題に関する2冊以上の本を読み比べる方法
41	文章から必要な情報を取捨選択するための読み方
42	グラフなどの図表の読み解き方
43	引用と要約とを分けてメモする方法
44	事実と意見を区別して書く方法
45	自分の意見と他人の意見を分けて書く方法
46	根拠を明らかにして自分の考えを書く方法
47	主題が明確になる書き方
48	主題と主題を支える部分を分けて書く方法
49	書くためのプロセス（構想・下書き・推敲・校正の順序）
50	論文を3部構成（序論、本論、結論）で書く方法
51	本論の論理的な展開方法
52	文章を帰納法と演繹法で構成して書く方法
53	文章の種類（たとえば意見文、物語）の違いに応じた書き分け方
54	グラフなどの図表の書き方
55	文章全体ではなく、1つの段落の中の構成を意識した書き方
56	批評文の書き方
57	文章を時間順に構成して書く方法
58	文章を分類別に整理して書く方法
59	文章を「原因と結果」で構成して書く方法
60	文章を「比較と対照」で構成して書く方法

## 4. 【研究2】国語科教員と学校図書館専門職員との言語スキル指導可能性の検討

### 4.1 質問紙調査の概要

【研究1】で抽出した60の「言語スキル（表3）」に関して、国語科教員は実際にどの程度教育しているのか、また同じスキルを学校図書館で指導することが可能かどうか、以下2つの質問紙調査を行った。この調査は首都圏の120校の私立中学校を無作為に抽出し質問紙を送付して行った。

調査1：国語科教員の指導状況については、単に「指導している」としても継続しているのか継続していないのか、また継続している場合でも国語科全体で継続しているのか個人的な継続なのか、細かい教育状況を質問した。その結果、20校（回収率16.6%）70名から回答を得ることができた。

調査2：学校図書館専門職員の言語スキル指導の意識については、通常図書館が指導する、調べるためのスキル以外に、読むこと、書くこと、考えることなどの言語スキルについて、学校図書館がどこまで指導できると考えているのか質問した。その結果、24校（回収率20%）24名からの回答を得ることができ、インタビューでの補足も行うことができた。

### 4.2 質問紙の結果：国語科教員の指導意識と学校図書館専門職員の指導意識

国語科教員、学校図書館専門職員とも、60の言語スキルについての指導の可能性を次の数式によって算出した。

$$\text{指導可能性} = \text{指導可能と回答した人数} / (\text{全体の人数} - \text{無回答など}) \times 100$$

つまり、100に近いほど指導できると回答した人数が多いことになる。その結果を、国語科と学校図書館とで比較して数値が大きい方に網掛けをして表4に示した。さらにそれをレーダーチャートで示したものが図1である。これを見ると、国語科で指導しているスキルと学校図書館で指導できるスキルとがあまり重なっていないことがわかる。つまり、学校図書館が国語科の言語スキル指導で不足する部分を補強することで、本研究で抽出した言語スキル60項目は指導可能となる項目が多いことがわかった。

表 4：図書館・国語科のスキル指導可能性

設問	指導可能性		設問	指導可能性		設問	指導可能性	
	図書館	国語		図書館	国語		図書館	国語
1	65.0	98.6	21	95.8	65.7	41	87.0	62.7
2	65.0	95.7	22	91.3	66.7	42	62.5	46.2
3	68.2	94.0	23	95.7	61.8	43	65.2	47.1
4	52.4	94.1	24	45.5	98.6	44	50.0	79.1
5	50.0	68.1	25	42.9	95.7	45	50.0	73.1
6	45.5	63.2	26	57.9	42.9	46	50.0	88.9
7	40.9	82.6	27	40.0	89.1	47	21.7	82.6
8	81.8	42.6	28	30.4	85.1	48	26.1	76.1
9	69.6	38.6	29	23.8	91.2	49	54.2	85.5
10	38.1	89.9	30	28.6	74.6	50	54.2	82.1
11	61.9	54.5	31	38.1	72.7	51	22.7	77.4
12	22.7	89.7	32	28.6	85.1	52	23.8	38.5
13	27.8	74.2	33	28.6	79.1	53	20.0	47.7
14	87.0	23.7	34	83.3	61.2	54	25.0	20.3
15	36.4	55.2	35	95.8	43.9	55	15.0	47.7
16	47.6	72.7	36	95.8	46.3	56	10.0	43.8
17	72.7	40.4	37	95.8	80.9	57	16.7	41.8
18	47.4	21.4	38	95.8	22.7	58	22.2	37.9
19	75.0	48.1	39	82.6	52.0	59	16.7	50.7
20	95.8	65.4	40	87.5	35.8	60	16.7	43.3

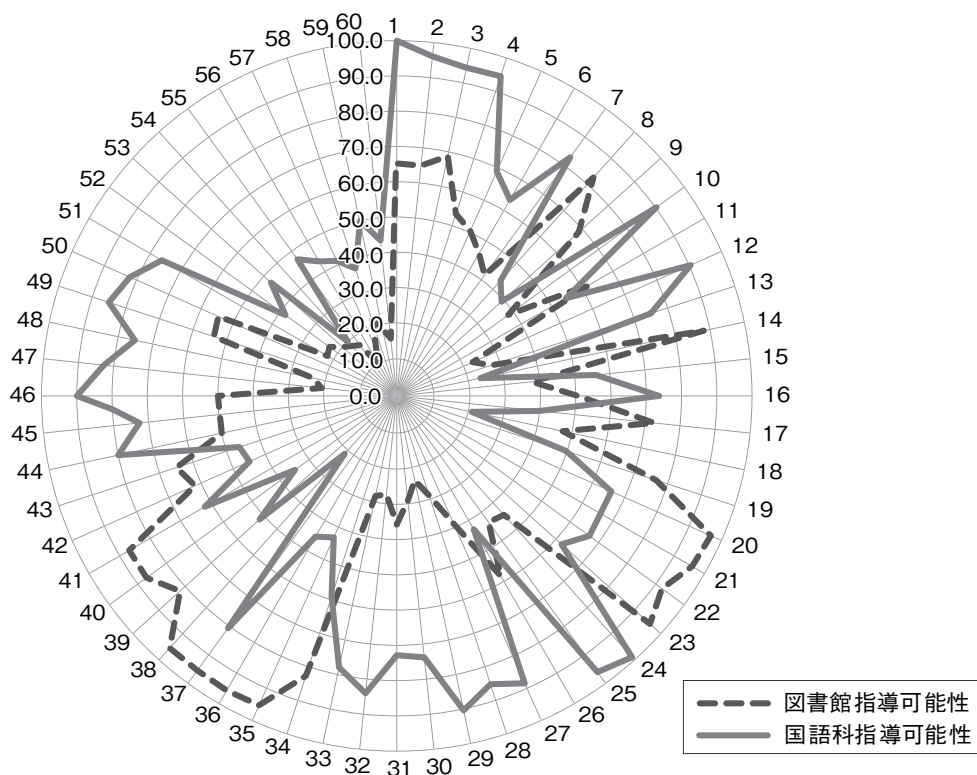


図 1：図書館・国語科のスキル指導可能性

しかし、一方で問題点も明らかになった。双方の数値がともに低く、生徒への指導が行われていない項目が多数存在することである。指導可能性の数値がともに70を切った項目と、その中でも双方が60を切った項目に網掛して表5に示した。表5からは指導の可能性が低い項目の多くは「書くこと」であることがわかる。特に具体的な書き方や決められた構成でまとめて書くことの指導が弱いようである。

表5：指導の可能性が低い項目

	ともに指導可能性が70以下のスキル（網掛はともに60以下）	指導可能性	
		図書館	国語
5	論証のしかた	50.0	68.1
6	批評のしかた	45.5	63.2
9	書籍全体の構成のつかみ方	69.6	38.6
11	上位語（上位概念）・下位語（下位概念）の関係性	61.9	54.5
15	帰納法と演繹法との考え方の違い	36.4	55.2
18	ベン図を書いて考える方法	47.4	21.4
26	拾い読み・下読み（スキミング・スキヤニング）の技術	57.9	42.9
42	グラフなどの図表の読み解き方	62.5	46.2
43	引用と要約とを分けてメモする方法	65.2	47.1
52	文章を帰納法と演繹法で構成して書く方法	23.8	38.5
53	文章の種類（たとえば意見文、物語）の違いに応じた書き分け方	20.0	47.7
54	グラフなどの図表の書き方	25.0	20.3
55	文章全体ではなく、1つの段落の中の構成を意識した書き方	15.0	47.7
56	批評文の書き方	10.0	43.8
57	文章を時間順に構成して書く方法	16.7	41.8
58	文章を分類別に整理して書く方法	22.2	37.9
59	文章を「原因と結果」で構成して書く方法	16.7	50.7
60	文章を「比較と対照」で構成して書く方法	16.7	43.3

これらの多くはアメリカの Language Arts で教育する内容から抽出した項目であった。Language Arts では「時間順」「分類別」「原因と結果」といった思考過程に沿った構成による作文方法を教育している。考えたことをまとめて書くための「フォーマット」も用意されている。例えばベン図は「比較と対照」を考えるために必要な思考を可視化する「考える型（フォーマット）」である。アメリカでは、このような思考の過程や思考の枠組みを可視化したワークシートや図・表などを「グラフィック・オーガナイザー」と呼び、広く教育界で利用している。すなわち、ここで問題とすべきは、書くことそのものよりも書くに至るまでの「考え方（考える方法）」が指導されていないことにある。まとめて書くためには考えなければならない。まさに、新学習指導要領が育成を目指す「思考力・判断力・表現力」が足りなかったことがうかがえる。

欧米の学校図書館では、グラフィック・オーガナイザーを問題解決のプロセスをたどる思考の指導のために利用する。思考を図式化することによって、その思考を言語化することも容易になるためである。また、思考スキルを学ぶだけでなく、メタ認知の技能を育成することも可能となる。日本の学校図書館でもグラフィック・オーガナイザーを利用す

ることで、言語の持つ論理と思考の指導を担える可能性があると考えられる。

## 5. 【研究3】教科と学校図書館との協働授業による言語スキル教育の実施と検証

### 5.1 授業の内容

【研究2】によって、生徒への指導が不足しているスキルが数多く見つけられた。そこで、【研究3】ではその中のいくつかを選択して実際の授業で指導し、その効果を検討してみることにした。この実験的な研究授業は、かえつ有明中・高等学校の中3の古典「木曾の最期」と中1の地理「中国」の単元で実施した。総時間数は古典も地理もそれぞれ6時間配当である。

#### (1) 中3古典「木曾の最期」について

「木曾の最期」とは、『平家物語』の中の1つの段である。この段の概要は、木曾義仲が宇治川の戦いで義経軍に破れ、無惨な最期を遂げるというものである。途中には愛する巴との別れ、ラストには乳母子今井四郎（兼平）の壮絶な自害も描かれた作品である。

#### (2) 中1地理「中国」について

中1地理で図書館を利用して授業を実施することは、他の教科と比較して多い。その利用は図書館の資料を利用した探究型学習が中心である。しかし、今回社会科教員から提示された学習の目標は探究型の授業ではなく、その前段階の知識の「習得」「活用」を狙った授業である。

### 5.2 実験的な協働授業の方法

実験的な授業では、表6に示したスキルを指導した。総じて指導可能性が低かった言語スキルのうち、国語科よりも図書館での指導可能性が高くなった3項目と、全般的に指導可能性が低かった「書く方法」の指導を行った。これらの言語スキルに関して、アメリカやカナダの学校図書館が利用しているグラフィック・オーガナイザーを用いた支援方法を活用した。思考を可視化することで、生徒の言語活動を高め、生徒が自分の思考を自分自身で確認することを狙った。さらに、学校図書館のスキル指導と各教科での指導内容とを1冊にまとめたワークブ

表6：実験的な授業で指導した言語スキル

	ともに指導可能性が70以下のスキル	指導可能性	
		図書館	国語
9	書籍全体の構成のつかみ方	69.6	38.6
18	ベン図を書いて考える方法	47.4	21.4
42	グラフなどの図表の読み解き方	62.5	46.2
	書く方法（5：論証のしかたを含む）	—	—



図2：ワークブック

ックを教材とした。これまで別々に配布されることが多かったプリント類を1冊のワークブック型の教材としてまとめて提示したことも新しい試みである(図2)。

### 5.3 学校図書館からの実験的な支援の内容

#### 5.3.1 「書籍全体の構成のつかみ方」：古典の内容

書籍全体の構成をつかむための「プロットシート(図3)」を「読む」ための支援として用いた。このプロットシートは、話の始まり、クライマックス、そしてラストへとあらすじを図式化できるものである。「木曾の最期」の授業では、まず生徒に絵本『木曾義仲(源平絵巻物語第4巻)』を読み聞かせ、話の筋をプロットシートで確認させた。絵本は、教科書に記載された物語に至るまでの木曾義仲の生き方、またその後の話までが語られている。そのため、生徒は教科書だけでは得られない「木曾の最期」の話の前後関係をつかむことができる。図書館では、通常行う読み聞かせに加え、話の筋の定着を意図した「情報の取り出し」の指導を行ったのである。

そして最終的に生徒は教科書の筋を白紙のプロットシートに書き入れる。生徒は話の構成をつかむためのプロットシートを用いた方法を2回練習したことになる。

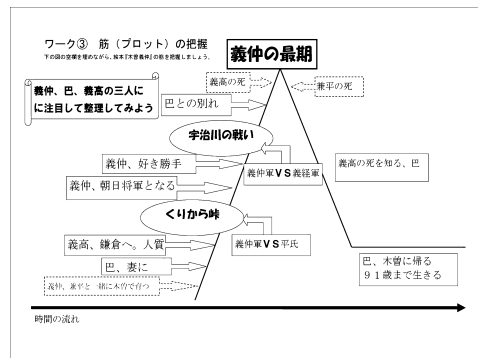


図3：プロットシート

#### 5.3.2 「グラフなどの図表の読み解き方」：地理の内容

地理の授業では、図書館から「グラフなどの図表の読み解き方」を指導することにした(図4)。グラフ指導は、PISA型読解力が連続テキストだけではなく非連続テキストの読解にも対応しなければならないことから、学校図書館でも指導を進めたいと考えている。また、図書館でグラフを指導する根拠の1つは、図書館資料としての統計が探究型学習で頻繁に活用される不可欠なものだからという点である。実際、全国学校図書館協議会(2008)が発行するワークブックにも、統計資料や年鑑の紹介とともにグラフを読み取るワークが掲載されており、学校図書館がこれらの指導を行うよう推奨されている。

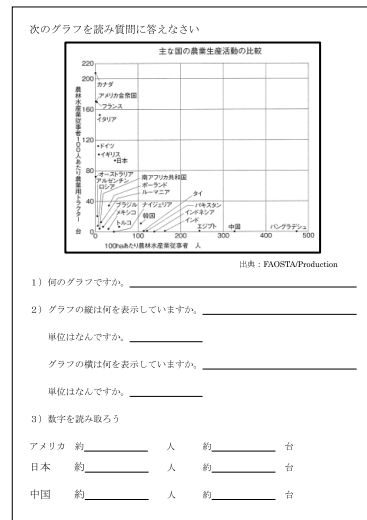


図4：グラフ指導

### 5.3.3 「ベン図を書いて考える方法」：古典／地理の内容

ベン図は、「比較と対照」のためのグラフィック・オーガナイザーである。ベン図は「類似点」と「相違点」を明らかにする思考の整理のために頻繁に利用されている。本研究では、「ベン図」の代わりに、生徒にとってわかりやすい「比較対照シート（図5）」を利用した。2つの事象を比べて、その類似点と相違点が一目でわかるように作られた図である。

古典「木曾の最期」では、対照的な木曾義仲と今井四郎の両名を比較するために利用し、地理「中国」では中国西部地域と中国東部地域の特色を明らかにするために利用した。

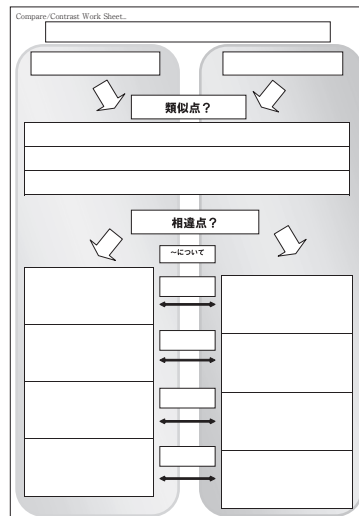


図5：比較対照シート

### 5.3.4 「書く方法（論証のしかたを含む）」：古典／地理の内容

【研究2】の質問紙調査では、何らかの決められた構成に従って書く方法を教えることが少ないという結果が出ている。そのため、論証をするための「ツールミン・モデル」に従った意見文シートを図書館発の教材として作成した。相手を説得できる理由づけが矛盾なく整う、論理的な思考を図式化したものである。この研究では、簡単な意見文が書けるように、論証（データ、理由、裏付け、反論の想定、反論への反論）がそろそろ完全な形ではなく、簡便な形式のものを作成した。さらにテキストから根拠を抜き出し埋めることで簡単な意見文が書けるように導くスタイルとした（図6）。根拠を調べ、記述するスタイルは、学校図書館の探究型学習の最終レポートにも不可欠な知識であるため、学校図書館が指導する意義は大いにある。古典では木曾義仲と今井四郎を比較した意見文、地理では東西の違いをもとにした意見文を書かせた。

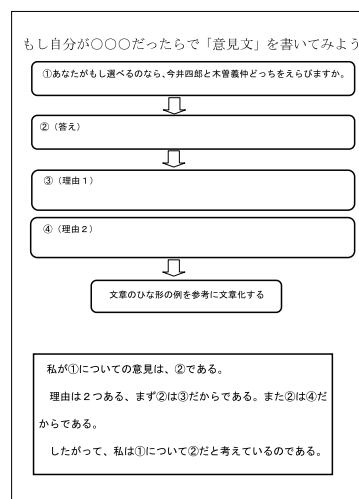


図6：意見文シート

## 5.4 実験的な支援の結果

生徒の言語能力の育成のために図書館からの新しい支援を行ったが、それを生徒はどのように受け止めていたのか質問紙調査によって検証する。

### 5.4.1 「書籍全体の構成のつかみ方」：古典の結果

プロットシートの利用が、絵本や教科書の原文を理解することに役立ったかどうか（有



用性1) という設問には80.1% (絵本の理解)、84.9% (教科書の理解) の生徒が役立ったと回答した。また今後使えそうか (有用性2) という設問には81.7% の生徒が使えそうだと回答している。一方で、プロットシートの利用方法そのものの理解に関しては若干低い数値 (76.8%) となった (図7)。

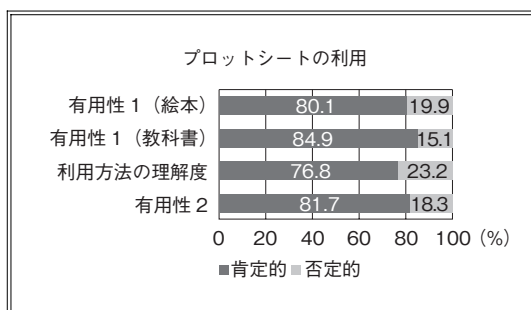


図7：古典：プロットシートの利用

また、プロットシートの理解度と筋の理解度をクロス集計表 (表7) で示した。度数に偏りがあるために、正確な検定を行うことができなかったが、両者には関連があることが推測される。プロットシート利用の狙いである、話の筋の理解については、94.6% (157人) の生徒が理解したとしたことから利用の効果がうかがえる結果となった。

表7：話の筋の理解度×シートの理解

		「本曾の最期」の話の筋				合計 (人)
		よく理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	まったく理解できなかった	
筋をプロットシートで確認する方法	よく理解できた	27	11	0	0	38
	まあまあ理解できた	39	47	4	0	90
	あまり理解できなかった	11	17	3	0	31
	まったく理解できなかった	2	3	0	2	7
合計 (人)		79	78	7	2	166

#### 5.4.2 「グラフなどの図表の読み解き方」：地理の結果

グラフを読み解くことが中国の地理を理解するうえで役立ったか (有用性1) という設問には91.3%が役立ったと回答した。グラフを読み解く方法は他の授業でも利用できそうか (有用性2) との設問にも90.3%の生徒が肯定的な回答をした (図8)。また、グラフの読み解きの理解ができていない者は、書き方の理解も出来ていない可能性が高いと推測される (表8)。社会科地理は、グラフや図表、地図などの非連続テキストを読み取る力や書く力も必要とされる。これまでの授業時間内ではなかなか指導に手が回らない「読み解き」の指導を図書館の統

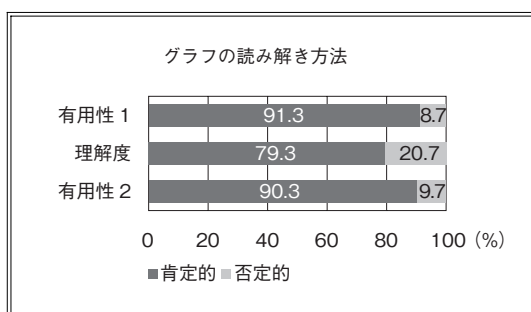


図8：地理：グラフ読み解き方法

表8：読み解き方法×書く方法

		グラフの書き方				合計 (人)
		よく理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	まったく理解できなかった	
グラフの読み解き方	よく理解できた	17	8	2	1	28
	まあまあ理解できた	7	32	6	0	45
	あまり理解できなかった	0	9	8	1	18
	まったく理解できなかった	0	0	0	0	0
合計 (人)		24	49	16	2	91

計資料の紹介とともに実行することができたことは、グラフの書き方にも良い影響を与えている可能性がある。

しかし一方で、グラフを読み取る方法そのものの理解は79.3%が肯定的な回答をしたにとどまった（図8）。今後、よりよい指導方法を再検討する必要が示唆される結果となった。

#### 5.4.3 「ベン図＝比較対照を書いて考える方法」：古典／地理の結果

この指導方法は、古典と地理の双方で利用したため、それぞれに次の3点を質問した。

- ①比較対照シートの利用は「木曾の最期」や中国の学習に役立ったか（有用性1）、②利用方法が理解できたか（理解度）、③今後の学習に利用できそうか（有用性2）である。

##### ◇古典での利用結果

比較対照シートの利用の有用性や利用のための理解度は、8割以上の生徒が肯定的な意見を持った（図9）。また、古典「木曾の最期」では2人の主要な人物を把握するために利用したが、実際に登場人物を把握することができたかという設問には90.4%（151人）の生徒が把握できたとしている。さらに、シート利用の理解度と登場人物の把握との間にも関連が見られるようである（表9）。しかし今回の質問紙だけではその相関関係を結論付けることが難しいので、比較対照シートを利用することで登場人物を把握しやすくなるのかといった直接関係はさらに研究する必要がある。

##### ◇地理での利用結果

地理「中国」では、中国そのものを「比較対照」の考え方をういて分析する手法については85.6%が役立ったとした（有用性1）。その一方で、比較対照シートの利用方法の理解度は、78.7%が肯定的な意見を持ち、今後このシート型の学習に使えるかという設問（有用性

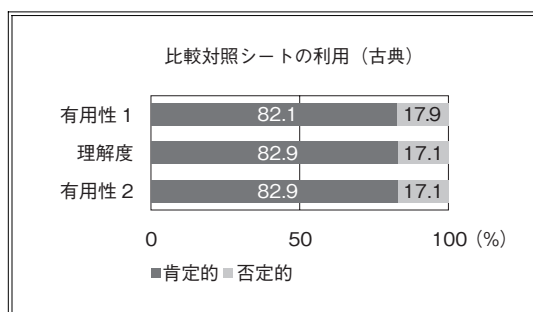


図9：古典：比較対照シートの利用

表9：登場人物把握×比較対照シート

		「木曾の最期」の登場人物の把握				合計 (人)
		よく理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	まったく理解できなかった	
比較対照シートで比較する方法	よく理解できた	25	7	1	0	33
	まあまあ理解できた	36	64	7	0	107
	あまり理解できなかった	9	8	3	1	21
	まったく理解できなかった	0	2	2	2	6
合計 (人)		70	81	13	3	167

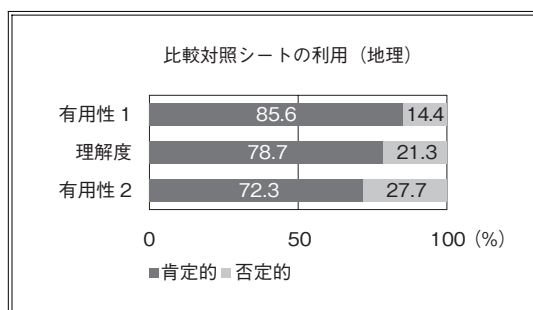


図10：地理：比較対照シートの利用

2) では、72.3%が肯定的な見方をしたにとどまった(図10)。この原因は、古典が人物という具体例を比較したこととは違い、地理の授業では中国の東部と西部の違いという、形の無い地域性を比較したことにあるのかもしれない。社会的な事象を比較するための特別なワークシートだと捉えた可能性がある。それは質問紙の自由記述からもうかがえた。

この授業では、中国の東西格差を理解することも目的の1つであったが、81.3% (74人) の生徒が東西の違いを理解したと回答している。比較シートの利用の理解とのクロス集計は表10に示したとおりである。この両者との間に関連があると推測されるが、その詳細はさらに検討する必要があるだろう。

#### 5.4.4 「書く方法(論証のしかたを含む)」: 古典/地理の結果

意見文シートの利用の評価は、今後の学習に利用できるかという設問(有用性2)のみを判定した。すなわち、教科横断的な知識として生徒が認識しているかどうかを検証したのである。

その結果、意見文シートの有用性は古典「木曾の最期」では68.6%、地理「中国」では73.4%の生徒が肯定的な回答をした(図11)。また、意見文シートの利用の理解と今後の有用性の感じ方の間には関連があると推測される(表11)。意見文シートの利用の意義や方法を理解することで、他の教科への転用も進むとも考えられるため、さらなる調査を行いたい。

また、この意見文シートでの文章作成指導は、教員側からの肯定的な反応が大きかったことが教員へのインタビューでわかった。理路整然とした文章を書くことができる生徒を見て、その効果を感じたのである。そして、多くの教員が意見

表10: 東西格差解×比較対照シート

		中国の東西の違い				合計(人)
		よく理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	まったく理解できなかった	
比較シートの利用の理解	よく理解できた	20	20	4	0	44
	まあまあ理解できた	10	17	5	1	33
	あまり理解できなかった	1	5	7	0	13
	まったく理解できなかった	0	1	0	0	1
合計(人)		31	43	16	1	91

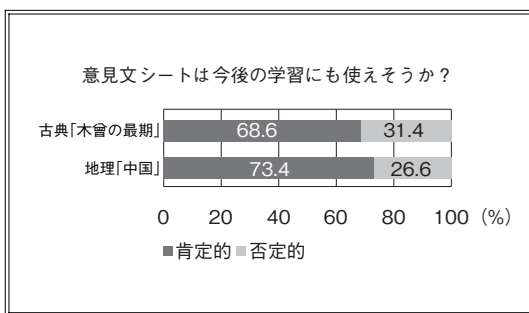


図11: 意見文シートの評価

表11: 意見文シートの理解×応用

		意見文シートは今後の学習に				合計(人)
		とても使える	まあまあ使える	あまり使えない	まったく使えない	
意見文シートの使い方は	よく理解できた	22	14	1	0	37
	まあまあ理解できた	7	46	8	0	61
	あまり理解できなかった	1	13	31	3	48
	まったく理解できなかった	0	2	1	2	5
合計(人)		30	75	41	5	151

文を書くことの指導に「教科横断的に行う意義」を見出していることもわかった。このような、どの教科でも利用できるスキルは、学校図書館が一元的にワークシートを提供したり指導したりすれば、いつでもすべての教科で利用することが可能である。そこに学校図書館が「教育のハブ」として関わる意義を見出すこともできる。

## 6. 本研究の意義と課題

### 6.1 本研究の結果と意義

本研究では、これからの生徒には言語が持つ機能のうち論理と思考に関する機能を重視すべきであるとの観点から、欧米の言語スキルや思考スキルの抽出を行った【研究1】。そして、それらに関して国語科教育での教育現状と学校図書館での指導可能性を明らかにした。その結果、国語科と学校図書館とが協力することで、抽出した言語スキルを教育できる可能性を見出した【研究2】。さらに日本で指導されている可能性が低い言語スキルのうち、国語科よりも図書館が指導する可能性が高いスキルを選択し、アメリカなどの学校図書館が用いる「グラフィック・オーガナイザー」を利用した指導を取り入れた実験的な協働授業を行った。その結果、生徒は考える型を用いて言語化する作業が学習内容の理解に役立ったと感じていることがわかった【研究3】。

したがって、言語能力の育成に果たす学校図書館の教育的な役割の1つとして、探究型学習に必要な言語スキルを中心に、思考を可視化する「考える型（グラフィック・オーガナイザー）」を利用した指導をすべきといえよう。先の図1にも示したように、国語科の指導可能性が低いスキルを学校図書館で補うことはもちろん、双方の指導可能性が低いスキルを教科と学校図書館が連携した協働授業を行うことで新しい教育の可能性が見出せるだろう。学校図書館が読書の推進をするにとどまらず、思考力の育成や言語活動の充実にも寄与することで、生徒の学習内容が充実するのである。

また、今回の実験的な授業を受けた生徒には学習意欲の向上が見られた。それは、生徒への授業前の質問紙調査と授業後の質問紙調査の自由記述から読み取ることができた。古典の授業に関する事前調査では、以下のような手厳しい授業への指摘が多かった。

- ・ 英文を解くときの決まりや数学の方程式みたいな決まったものが国語にはなく、一つの物語を解けたからといって次も解けるわけでもない。自分に国語力がつくという確信が得られない。
- ・ 何度も授業したところを定期試験として扱うので思考力より暗記力を問われている気がする。国語は本来、思考力を育てる科目だから、このやり方だとあまり効果的でないと思う。日本の生徒は記述に弱いというけれど、これでは当然だと思う。

しかし、実験的な授業後の調査のコメントには下記のような記述が非常に多かった。

- ・比較すること、自分の考えを出すことにより、その物語について深く考え、知ることができたので良かった。
- ・平家物語はむずかしくて、俺には縁もゆかりもないと思っていました。けど絵本やワークシートですごくわかりやすかったと思います。ドラマ感覚で覚えられました。
- ・木曾の最期をやって古典がはじめておもしろいと思った。他の武士の話もやりたいと思った。
- ・みんなが授業に参加していて、盛り上がっていたし、楽しかった。
- ・全体的に新鮮な感じの授業だった。
- ・進み方、授業の仕方が普段と違い、新鮮だった。場所が変わったこともあり、つまらないという気持ちになかった。

今回の授業の方法が生徒の学習意欲の向上にも良い影響を与えたと推測される。PISA調査では、日本の生徒の学習意欲が他の先進諸国に比較して低いという結果が出ている。本研究の授業で「学習が充実した」と生徒が感じたことは、その点から考えても大きな意義があった。

## 6.2 今後の課題

【研究1】【研究2】の結果をもとに行った【研究3】実験的な授業の結果からは、今後検討すべき課題が3点残された。

まず1点目は、生徒が得た知識を他の学習に転用できるかどうか具体的に検証すべきという点である。生徒はその場の学習内容の理解（有用性1）についてはおおむね良好な反応を示した。しかし、そこで学んだ知識の転用（有用性2）は、有用性1と比較すると総じて低かった。このようなことから、生徒に思考し言語化することの意義とその方法の汎用性を理解させる必要がある。そしてそのための効果的な指導方法に改良するには、生徒が学習する場面のデータをさらに取り、分析していく必要がある。

そして2点目は、学校図書館と教科が連携する場合の問題である。生徒への質問紙調査では「学校図書館の専門職員が教科の授業に参加することに違和感がある」とした回答が半数を占めた。また、教科教員が求める支援と学校図書館が提供したい支援との間で内容が食い違うこともあった。学校図書館が単に生徒だけに援助を行うのではなく、教員と学校図書館の専門職員がお互いの専門性を出し合い、完全に一致した目標で1つの授業をデザインし、それがカリキュラムに組み込まれた時に、生徒への教育効果は最大限に発揮される（Montiel-Overall, 2005）。教科教員と学校図書館との深い協働や連携の具体策の検討がさらに必要である。

さらに、本研究の3点目の大きな課題は、欧米流の指導方法が生徒の学力向上に直接つ

ながっているかどうかまでの詳しい検討が加えられなかったことである。本研究で追求したグラフィック・オーガナイザーを用いた学習は、アメリカの National Reading Panel の調査では、社会科や理科の読解内容の記憶、内容理解などの面の学力向上が見られたと報告されている (I.A.R.E., 2003)。しかし、今回の研究では深い追究にまで及ばなかったため、今後さらに検討する課題としたい。また今回の実験的授業では生徒の学習意欲の向上が感じられた。今後は、学力の向上の面だけではなく、学習意欲の向上に学校図書館がどう関わるることができるのか具体的な検討を進めたいと考えている。

## 7. おわりに

本研究は、学校図書館の専門職員や教科教員（国語科、英語科、社会科、理科）の研究者と、数学科教員の協力のもとで、新学習指導要領が求める「思考力・判断力・表現力」を育成するための「言語活動」と、それを支える言語能力に対して、学校図書館は何かできるのかについての研究を行った。その研究と実験的な授業のすべてを本稿に掲載することができなかつたため、書籍の形でまとめることにした（注）。今後は、本稿やその書籍に掲載した内容も踏まえ、さらに検討を加えていく予定である。

### 【謝辞】

学校図書館が果たす教育的役割について、数多くの教科が協力して研究する機会を与えてくださった「(財) 博報児童教育振興会」に感謝するとともに、研究に協力して下さった方々に深く御礼申し上げます。

### 【注】

本稿に掲載できなかったその他の研究成果は、下記の書籍にまとめている。本研究に参加した全員の研究成果はこの書籍をご参照願いたい。

桑田てるみ編著（2010）

『思考力の鍛え方 学校図書館とつくる新しい「ことば」の授業』静岡学術出版  
執筆者：桑田てるみ、眞田章子、庭井史絵、野村愛子、五十嵐卓司、大木理恵子、  
木之下瞬、黒瀬卓秀、法土明子、山崎佐知子、山田英雄、唐澤智之

### 【参考文献】

Alberta Learning. (2004). *Focus on inquiry: A teacher's guide to implementing inquiry-based learning*. Alberta Learning.  
<[http://www.education.gov.ab.ca/K\\_12/curriculum/bysubject/focusoninquiry.pdf](http://www.education.gov.ab.ca/K_12/curriculum/bysubject/focusoninquiry.pdf)>

- American Association of School Librarians. (2007). *Standards for the 21st—Century Learner*. Chicago : The American Library Association.
- Bloom, B. S. (Ed.). (1956). *Taxonomy of Educational Objectives : The Classification of Educational Goals. Handbook 1: Cognitive Domain*. New York : Longman.
- 中央教育審議会 (2008) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)』
- Eisenberg, M. B., & Berkowitz, R. E. (2000). *Teaching Information & Technology Skills : The Big 6 in Secondary Schools*. Worthington : Linworth Publishing.
- Eisenberg, M. B., & Robinson, L. I. (2005). *The Big6 Collection : The Best of the Big6 eNewsletter V.2*. Worthington : Linworth Publishing.
- Institute for the Advancement of Research in Education. (2003). *Graphic organizers : A review of scientifically based research*. Charleston, WV : Institute for the Advancement of Research in Education.
- Mikulecky, B. S. (1989). *A Short Course in Teaching Reading Skills*. Addison-Wesley Publishing Company.
- 文部科学省 (2008a) 『中学校学習指導要領解説 国語編』 東洋館出版社
- 文部科学省 (2008b) 『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』 教育出版
- 文部科学省 (2008c) 『中学校学習指導要領解説 総則編』 ぎょうせい
- 文部科学省 (2008d) 『中学校学習指導要領解説 社会編』 日本文教出版
- Montiel-Overall, P. (2005). A theoretical understanding of teacher and librarian collaboration (TLC), *School Libraries Worldwide*, 11(2), 24-48.
- Murray, J. R. (2008). *Achieving Educational Standards Using the Big6*. Columbus : Linworth Publishing.
- Parks, S., & Black, H. (1990). *Organizing Thinking, Book2*. Critical Thinking Press & Software.
- Reid, J. M. (1987). *The Process of Composition*. NJ : Prentice Hall Regents.
- Senator, R.B. (1995). *Collaborations for Literacy. Creating an Integrated Language Arts Program for Middle Schools*. CT : Greenwood Press.
- Shiras, R., & Smith, S. C. (2001). *Paragraph Writing Made Easy!* MO : Scholastic Professional Books.
- Toulmin, S. (2003) *The Uses of Argument*. Cambridge University Press.
- 全国学校図書館協議会 (2008) 『新版 図書館・学びかたノート 小学校高学年用』 全国学校図書館協議会